

研究課題 (テーマ)	看護学教員が看護アセスメントを学ぶ学生のネガティブ感情から学習課題を認識する過程		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部看護学科	准教授	小宮山 陽子
研究結果の概要			
<p>令和7年度は、令和6年度に行った看護学生を対象とした看護アセスメント学修課題に関する研究を進展させ、看護アセスメント教育に関わる看護学教員を対象とする研究調査を実施した。</p> <p>看護アセスメントは、情報収集・分析・統合・問題抽出を含む思考プロセスである。このプロセスは連続的かつ相互連関する複雑さを有するため、看護アセスメントを学修する学生は、ときに「どうしたらいいのかわからない」「難しい」などのネガティブな感情を抱くことがある。看護アセスメント教育に関わる看護学教員は、学生がネガティブな感情に向き合い、根気強く学び続けるための支援を日々行っている。その過程は看護学教員の経験の蓄積によって培われたものであり、看護アセスメント教育の発展にとって重要な実践知だと考える。</p> <p>そこで本研究では、学生がアセスメント学修の際に抱くネガティブな感情に着目し、この感情に気づいた教員が学生の有する課題を認識し、教育的介入に至る過程を明らかにする。</p> <p>【目的】</p> <p>看護学教員が看護アセスメントを学ぶ学生が抱くネガティブな感情に気づき、その内面にある学習課題を認識する過程を明らかにすることを目的とする。</p> <p>【方法】</p> <p>看護系大学でアセスメントの基本構造に関する講義と事例を用いた演習が組み入れられている科目を担当する専任教員を対象として半構造化面接を実施した。研究対象者は、協力の同意を得られた看護学教員4名であり、面接で、看護学教員の経験年数等の基本項目のほか「看護アセスメントを学ぶ学生のネガティブ感情に気づいた場面・きっかけ」と「学生のネガティブ感情から学習課題の認識に至る過程」を中心に、各60分程度自由に語ってもらった。</p> <p>【結果】</p> <p>語られた内容は、学内演習と臨地実習で生じる学生の課題に関するものであった。教員たちは学生が作成した記録物、発した言葉、表情、しぐさなどを総合的に捉え、学生が抱える課題に気づき、個々の特性や状況に応じて教育的介入をしていた。現在、その内容をより明確化するために、逐語録の分析を進めている。</p>			
今後の展開			
<ul style="list-style-type: none"> ・教員インタビューデータの分析を進める。具体的には、インタビューデータをコード化・カテゴリー化して研究対象者にみられる共通事項を抽出する。また、対象者個々のインタビューデータをより詳細に読み解き、それぞれの教育的視点と特性について考察する。 			